

文化史・文化理論の再構築

研究代表者 福 沢 榮 司
平成19年度より 佐々木 充

1. 分担者

福 沢 榮 司
佐々木 充
三 浦 淳
齋 藤 陽 一
猪 俣 賢 司
逸 見 龍 生
番 場 俊

2. 2006年度の研究活動の概要

20世紀的な知を再検討し、文化史・文化理論の再構築をめざす本プロジェクトは、(a)表現媒体間の比較研究、(b)文化媒介のダイナミクス、(c)大衆文化へのアプローチ、(d)物語理論とイメージ論の四点を中心に進められている。以下、これにそって2006年度の研究の概要を述べる。

(a)の課題は、齋藤、逸見、番場を中心にすすめられた。齋藤は本プロジェクトが平成18年3月8～9日に本プロジェクトが主催した公開研究会「テキストと身体」における報告をまとめ、異文化テキストの翻訳の際に生じる身体の変容について考察した。逸見は慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構の訪問助教授として『百科全書』電子化プロジェクトの研究代表をつとめるとともに、哲学的地下文書のメディア的特性に注目する研究をおこなった。また番場は小説とジャーナリズムの言説の関係の構造的分析をすすめるとともに、絵画や写真といったメディアが他の言説領域と交差することによって生じるいくつかの問題を考察した。

(b)の課題は三浦，逸見を中心にすすめられた。三浦は昨年度に引き続きグローバル化した現代における鯨イルカ・イデオロギーの思想的意味を検討した。逸見は前述の「ポスト百科全書主義プロジェクト」とともに，科学研究費補助金による研究「啓蒙と東アジア：相互性のプリズムを通じた18世紀学の構築」をすすめた。

(c)の課題は福沢，猪俣を中心に進められた。福沢は現代日本における大衆文化の諸相を村上春樹の小説やポップ・ミュージックの事例に基づいて検討した。猪俣は戦後の特撮映画のなかに残存する国策映画の影響を詳細に分析することによって，戦時・戦後文化史の連続性と断絶を再検討した。

(d)の課題は佐々木，逸見，猪俣，番場を中心に進められた。佐々木はシステム論の第三代理論であるオートポイエーシスを文学に適用の可能性を探るため，初期マラルメの詩の生成過程をオートポイエーシスの観点から追究した。また佐々木，逸見，猪俣，番場の四名は「イメージ」を主題とする共同の講義において，精神分析，メディア史，映画史，記号論などの視点を交差させる試みをおこなった。

3. 2006年度の研究成果の概要

「研究成果の一覧」の通り

4. 2006年度の研究成果の一覧

【論文】

- 1) 佐々木充「初期マラルメにおけるオートポイエーシス(2)」、『表現文化研究』第3号（新潟大学大学院現代社会研究科発行，2007年3月），39-57頁
- 2) 三浦淳「鯨イルカ・イデオロギーを考える（Ⅱ）——藤原英司の場合（その2）」、『人文科学研究』第119輯（新潟大学人文学部発行，2006年11月），111-134頁
- 3) 齋藤陽一「日本における『三人姉妹』の上演をめぐる」、『テキストと身体』（北海道大学スラブ研究センター21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No. 19），2007年3月，60-75頁

- 4) 猪俣賢司「空想と精密描写の詩学——古典詩学から特撮映像論へ」、『人文科学研究』第119輯，(新潟大学人文学部発行，2006年11月)，135-161頁
- 5) 猪俣賢司「帝国の残映とゴジラ映画——爆撃機の特撮映像論」、『人文科学研究』第120輯，(新潟大学人文学部発行，2007年3月)，79-102頁
- 6) 逸見龍生「ディドロ執筆項目『『霊魂』補遺——『百科全書』本文校訂の試み」，2006年12月，『藝文研究』第91号(慶應義塾大学文学部紀要)，45-66頁

【著書】

- 1) 番場俊(共著)，栗原隆編『芸術の始まる時，尽きる時』東北大学出版会，2007年3月(「言葉の受肉，あるいは記号論の複数の可能性について」107-127頁を担当)

【その他の実績】

- a) 内外で開催された国際学会・国際シンポジウムでの講演・報告の実績
 - 1) 逸見龍生 平成18年度秋季日本フランス語フランス文学会全国大会・国際ワークショップ「哲学的地下文書の諸問題」平成18年10月29日・岡山大学(フランス語による司会および報告。タイトル「哲学的地下文書と『百科全書』におけるエクリチュールの生産」)
- b) 調査歴
 - 1) 逸見龍生 パリ国立図書館(フランス共和国)にて資料調査(科学研究費基盤研究B(一般)・「啓蒙と東アジア：相互性のプリズムを通じた18世紀学の構築」分担者)
 - 2) 番場俊 北海道大学での資料調査，2006年9月4日～7日(科学研究費若手研究B「ロシア文化史のコンテクストにおけるミハイル・バフチンの記号概念の再検討」)
- c) 学外での兼任・客員研究員歴
 - 1) 逸見龍生 平成18年度，慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構，訪問助教授，『百科全書』電子化プロジェクト研究代表

d) 学会発表, 司会など

- 1) 逸見龍生 日本18世紀学会・個人論題司会(クレール・フォヴェルグ(名古屋大学文学部外国人教師)「ディドロとライプニッツにおける楽観主義」), 平成18年6月10日, 広島大学文学部
- 2) 逸見龍生 『百科全書』国際研究集会司会, 平成19年3月27日, 慶應義塾大学文学部, コメント
- 3) 逸見龍生 19世紀学学会・平成18年12月23日, ホテルイタリア軒, 報告タイトル「近代的作者の概念とその変容」
- 4) 番場俊 第一回表象文化論学会におけるパネル「ロシアの(逆)遠近法」の組織および司会, 2006年7月1日, 東京大学駒場キャンパス

e) その他

- 1) 番場俊「絵画的平面の破壊——マレーヴィチ論ノート」, 佐藤徹郎『思想表現媒体から捉え直される, 人間にとっての「空間」構成の意義についての研究(課題番号17320002)』(平成17年度~18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書), 2007年3月, 119-132頁
- 2) 番場俊『『罪と罰』——メディア・リテラシーの練習問題』, 『すばる』2007年4月号(集英社, 2007年3月), 264-269頁
- 3) 番場俊(編集および「はしがき」)『テキストと身体』(北海道大学スラブ研究センター21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No. 19), 2007年3月